

〈僅少〉を表す語彙の形成

山際彰

現代の〈僅少〉を表す表現には、(1a, 1b) のような語群がある (仁田義雄 1981 「数量に関する取りたて表現をめぐって—系列と統合からの文法記述の試み—」『島田勇雄先生古稀記念ことばの論文集』明治書院)。これらは、客観的事実である数量を「小さい数量」として把握・評価する」ことを示すが、歴史的に見て比較的新しいものである。

(1a) 要旨は {**A群** たかだか／たかが／せいぜい, **B群** たった／ものの／ほんの} 200 字だろ。早く書け。

(1b) 要旨は 200 字しかない (ん) だろ。早く書け。

そこで、本発表では (1a) のような語群を、「せいぜい頑張り」のように数量表現以外を修飾する際には〈限度〉や〈マイナス評価〉といった評価付けを表すが (安部朋世 2005 「セイゼイ・タカダカ・タカガの意味分析」『千葉大学教育学部研究紀要』53), 数量表現を後接させると〈僅少〉と解釈できる A 群と、体言 (主に数量表現) を修飾して専ら〈僅少〉を表す B 群からなる〈僅少〉を表す語彙とし、次の点を指摘する。

(I) 現代の〈僅少〉を表す語彙が形成されたのは近世～近代であり、それ以前には A 群は助詞類, B 群は主に「ただ」が当該の意味分野を担っていた。

(II) 上記の要因として, A 群は係助詞の体系の変化, B 群は「ただ」の語義縮小が関連している。

現代で〈僅少〉を表す表現である A 群や B 群, 助詞「しか」はいずれも近世～近代にかけて定着する (「たかだか」は上代が初出だが, 〈僅少〉の定着は当該期間)。その要因には, 係助詞の「語レベルで意味機能を分担するシステムから統語構造が意味機能を支えるシステムへ」という少ない語が複数の意味を担うという変化 (宮地朝子 2007 『日本語助詞シカに関わる構文構造的研一—文法史構築の一試論—』ひつじ書房), および多義語「ただ」の語義縮小 (山口堯二 2004 「「ただ」の意義分化」『京都語文』11) に伴い, その代替表現が要請されたことが想定されることを述べる。